

第58回

活力ある高齢化と地域活性化

—学生のSDGs視点から

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授 野田 真里

【行方市SDGs フィールドワーク2025】を、茨城大学学生が私の指導の下、本年度も実施させていただきました。「活力ある高齢化と地域活性化」を主題とし、各テーマ別グループで調査を行いましたので、以下その概要についてご紹介させていただきます。市民の皆さまのご参考になれば幸いです。ご協力いただいたなめがたしおさい農業協同組合の金田富夫組合長ほか皆さま、なめがた地区保護司会の茂木功会長ほか皆さま、そして行方市の方波見誠前副市長ほか関係各課の皆さまに心より御礼申し上げます。地域の持続可能な発展と関係人口の創出に貢献できれば幸いです。なお、学生による原文を尊重しつつ、必要な編集を行っています。

1. 活力ある高齢化の三要素 (W H O) と農業

日本の地域社会は、急速な高齢化が進んでいる。こうした中で地域社会を持続可能で活力あるもの

に対するには、世界保健機関（WHO）が提唱する活力ある高齢化とその三要素である「健康」「参加」「安全」に注目する必要がある。

行方市は、農業を基幹産業として、各テーマ別グループで調査協同組合の果たす役割は大きい。まず「健康」については、全国厚生農業協同組合連合会による健康診断や医療支援が行われている。次に「参加」については、高齢農家が新しい品種の栽培や海外輸出への挑戦、部会活動、文化・レクリエーション活動を通じて、社会的役割を果たしており、生きがいを高め、また世代間のつながりを生みだしている。そして「安全」については、農業保険や安全講習、女性部による見守り活動が、高齢者や地域の安心を支えている。

（農業と活力ある高齢化 研究グループ）

2. 保護司活動における高齢者

保護司は、法務省から委嘱され

に、夜間送迎応援タクシーは、若者や子育て世代の移動に大いに寄与しているが、行政コストが高い等の課題が残る。

AIによる配車最適化が導入されをしている。まず、デマンド型コミュニケーション役割を担っている。行方市では、高齢者が保護司として地域の安心・安全な暮らしに大きな貢献

をされている。

保護観察対象者との継続的な信頼関係の構築は、再犯防止や地域の安全確保、住民への啓発活動に貢献している。また保護司活動は、高齢者にとっても重要な社会参加の機会となっており、対象者の更生や社会復帰への支援にやりがいや生きがいを感じている。

保護司は、地域のキーパーソンが多いが、高齢化が進む中、後継者の確保が課題である。保護司活動を高齢者の社会参加モデルとして位置づけ、さらに認知される仕組みづくりが重要である。

3. 高齢者等交通弱者を取り残さない持続可能な公共交通

高齢化が進む行方市において、免許返納者や高齢者等の交通弱者への移動手段の確保は、極めて重要な課題である。公共交通が抱える課題としては、鉄道駅が無く、住宅が広域に分散しているため、固定的な路線バスの整備が難しく、自動車依存度も高い。

行方市では、住民ニーズに対応

ている。まず、デマンド型コミュニケーションバスは、医療機関や買い物目的の利用が多く、交通弱者を支える重要な役割を果たしている。

（公共交通と活力ある高齢化 研究グループ）



▲「行方市SDGs フィールドワーク2025」茨城大学生と著者